一、弐度の秋入は勿論、常盤の干物捨るとも拾ひ□されず故に、所々へはへ却て手遣ふ事有。鶏飼ばよく拾ひ亦は夜ごみに□をさすによし。鶏卵に有益。

（付　記）

本資料作成にあたり高知市民図書館、隅田廸子女史には、古文書解読にあたり多大の御助力を戴いた。また夜須町教育委員会には資料閲覧に際して御便宜を賜った。記して感謝する次第である。

紫蘇梅（シソウメ）之事

一、梅漬を能日に二、三日干、紫蘇は塩にてもみ□□□へ□壺へ詰るなり。是毎朝早□に一ツ宛、茶にて喰へば胸のつかへを去り、疾気を治る也。

牛馬を飼事

一、或は牛馬三疋ならば、青艸（草）の時は、草壱荷苅、大麦三合煮、磨ぬか亦ハぼふてうにまぜ一日ニ二、三度に仕あわせ喰すべし。水は夜の五ツ迄（81）に四度呑すべし。暑のうちは昼一度清水呑し、十月頃にても青艸有うちハ苅てくわし、冬飼は大麦三疋に九合くわすべし。亦大根くわすれは麦に及ばず。しかれ共、大根喰続程なき積なれば、麦壱合五勺位にして大根もへして、長く続くよふに喰すべし。麦へも大根へも太磨ぬかぼうてうよく、ぬる湯にてもみしめて飼事。尤梯搗もよし。間は太薬、干薬の類、気を附飼ふべし。暖気立ては干草は喰かたし。其時は糠をもみしめ喰すべし。水は椀或鍋抔洗し、雑水（ゾウジ）少しわかし、一昼夜に五度呑すべし。ぞふ水なき時はぬか味噌にてもたて濁し飼ばよし。夜半頃一度ツ、水呑すべし。枯物喰水不足なれば煩ふなり。惣分水はそふけにてこして飼べし。一粒にても口に障れば捨て呑まず。こしかすははみに交て喰すべし。水は女房たるもの気を附べし。牛馬の冬飼に干うなぎ、獅子少々ツ、まぜ食すべし。干雑喉（ザコ）川雑喉（82）は冬夏ともによし。尤干うなぎは牛の革所々兀（コツ）して（83）時、艸に包喰すべし。又馬の革はげし時ハ青蛙、生ニて草に包毎々喰すべし。仕廻仕業之時、牛疲れ如何ともすべきよふ無キ時、土龍の黒焼少し呑すべし、一ト勢は出るものなり、尤□々ならでハすましき事秋入之時分□□の二番口さび返し、ひせ俵にして置べし。牛馬飼まぜによし。正摺ぬかより格別なり。

鶏飼て益有事

(81) 五ツ、午後八時

(82) 雑喉、雑魚

(83) 兀し、上が高く平らなこと

一、仕廻そへの事。白米六合右におなし。糀四升八合、右おなし。水六升、右おなし。惣分飯はむらなき様に随分蒸覚しきり仕込べし。返くも糀青花附又は、はせ鮮きは悪し。械は湧しづまりて後止むべし。尤械之度桶の脇へ糟附ものなり。随分械取べし。其儘置ば酒の傷に成なり、械におよばず時莚ニてざつと包置、極月廿五日より酒取初べし。それより内は少しも取べからず。生しぼりにして糟を壺へ詰置、夏物又は香物漬返し抔に遣ふべし。尤香物は二日程日に干漬てよし。

ほだい酒造り之事

（空白）

香物漬る事

一、米糖壱升に、塩弐合五勺として合せ、先桶底へほふり、大根一順並べし。其上にぬか大根之見へぬ程入、初之分横に置ば此度は堅（緊カ）に並べべし。又それより上も右之通、糠ほふり大根並べべ（ママ）し。次第にぬかつよく入置、香物出す時は箸にて取べし。直に手を入ば後傷むなり。右大根は霜月末、極月闇口に引葉をあさくおとし、土大根ニて十二、三日干、自由にわかむ大根を洗て漬べし。わがまざるは悪し。漬てよりおし強くかけ置べし。出し入の時由断なくおし置べし。蓋の上に汁のたまらざれバ、汐水してはやく入べし。

一、蕪漬は数百に塩壱升の積り、蕪よく洗、茎附に砂なきよふにし、大きは弐ツに割て干、其日塩にてもみしめ、桶へ並べ□□□へ太薬をちらし、押置なり。取時は大根の之通（ママ）りにすべし。惣分汁廻らずハ悪し。

一、神津漬之事□もみ菜頃の大根よく洗、葉ともに半日ばかり日に干、米糖壱升に塩壱合五勺位にませ合せ、右之小菜漬おし置べし。是へ茄子、胡瓜抔漬てもよし。茎漬も同し。

(79) ごと味噌、特別のみそ

一、ごと味噌は米糠(ヌカ)壱斗、醤油の実五百匁、酒の糟五百匁、塩壱升五合、右、一所の冬の土用に、酒の洗汁にてしめし、搗込置、夏の土用に又搗返すべし。仕こみ春になればもてず。

醤油仕成の事

一、小麦壱斗煎、引割、大豆壱斗煎、引割蒸、塩九升、水弐斗、右、麦、大豆一所にまぜ、糀に寝させべし。よくねせたる時、右之塩を入、四、五月頃日和水には造こむべし。其時大炭弐ツ三ツ火をおこし、其中へ入水を和らぐべし。七、八月頃□(ス)ごしにて取べし。尤三十日前に甘酒壱升計、糟とも入置□立べし。急きなくバ、おもの分ハ、日数□ル程よし。

一、弐番醤油は右壱番を取、仕込、其あとへ粥壱斗五升入、造るべし。日数七十日に至れは、取てよし。此糟ニてごと味噌仕成べし。

一、亦醤油仕成之事。小麦五升煎、引割。大麦白く搗五升蒸べし。大豆壱斗水に漬、一時計置、水をさり、一夜置蒸べし。各壱ツにして寝させ置、青花附し、時とりひろげ覚すべし。水弐斗塩八升。右一所に造りこむべし。尤前法之通なり。取三十日前に甘酒入るなり。

濁り酒造る事

一、白米壱升焚喰にして能覚し、糀壱升、但糀ははぜすくなく、又ハ青花附は悪し。水壱升清水よし。雨水は嫌ふべし。右各壱所に造りこむべし。明ル晩方械入(80)、それより仕まいそへの湧しづまる迄、刻限違わざるよふに械入べし。正月酒ならば十月初頃如レ此もとを取てよし。尤湧かたき時は火燵(コタツ)にて能暖むべし。

一、右そへかけ之事。白米弐升、一夜漬よく蒸なり。糀壱升八合右之通よく致べし。水壱升右之通此そへより十二、三日振にしまいそへして、械右之順に限るべし。

(80) 械、ここでは酒造用の道具の意

も。日をさめされば何事かあらん。鴈、鴨、鯛、□其外上品之類は能き衆の喰すべきものと心得、病気并煩等之節は、格別常盤百姓ことときの喰すれば罪当ると思ふべし。

一、酒は夕飯後に少し呑ば労を忘れ、朝疲レなく起やすし。至て楽保養第一之品なり。然れ共、酒の勢に労せば埒明とも却て、身の損有べし。酒ハはかりなしと申せども、客附合の時は、必小盃を定めて用事の勤ル程に呑べし。

味噌造る事

一、大豆壱 計糀（ママ）（コウジ）壱 升塩三升

大豆引割、皮を去り、一夜水に漬蒸べし。蒸不足は傷なり。それより大豆形ちなきよふによく搗、随分さまし、糀、塩とも合せ、粒なきよふに搗事。尤日に一度ツヽ、七日搗へし、雨天なれバ宜からず搗、仕まい之時、少〻ツヽ桶へ搗こむべし。ひだ有ばかひるなり。

一、ふすま味噌小麦之引かす壱斗。但水うちしめし蒸べし。よいかげんに覚し、少しほのきの有うち室蓋へ入、上に大茅並べ、莚を着せ置べし。三日ふりに花能附なり。夫を上下うちかへし、右のごとくして寝させる也。よくねせたる時ひろげてさまし、臼にて細く引、水甕にておろし、幾度も引糟なきよふにするなり。其浸へ麦の煮汁を取、しつにうち、常の糀の寝あんばいにしめし、日に干、麦糀に合すべし。麦糀は搗麦六升ざつと引割、一夜水に漬、蒸、常の糀のごとくねさす。ねせたる時ざつと日に干なり。大豆六升、常のことく皮を去り蒸べし。塩壱升五合まぜよく搗べし。桶に詰置、三十日になれば遣わるゝ。尤右之日数に搗返しすべし。麺類の汁に遣わんと思ハヾ、晩の入用に朝摺りどろりつとしたる時、袋にいれた味噌にし、それを焚時あんばいすべし。

一、麦味噌は、節麦壱斗煎、引割、常の如く寝させる。大豆弐升蒸ても焚てもよし。塩三升五合。右各一所に搗、桶に詰置、日に一度ツヽ三日搗べし。能なれねば益なし。今年の仕込来年遣い先くりにすべし。

一、糠（ヌカ）、肥しにせんと思ハヾ、土間へうつししつ打まぜ返し、莚二、三枚着せ置、畑作へ本を少しよけて置、土着せ置べし。亦田ごへにせんと思ハヾ、だるこへ壱荷に、糠（ヌカ）六合計入、水すくなき所へうちこむべし。

一、田植しまいなば、毎日人馬とも替り〳〵苅こへすべし。早く苅ば手寄に有柴若き故益有。こへたてる前に急ぎて毎日二辺苅にせば、人より遅きゆへ能所にはなし。是非なく遠方、亦は難所へ行、かた〳〵以人馬疲れる事顕然なり。尤夏ごへ苅より煤藁買事益なり。第一煤藁は其儘作りに置、其後牛馬の敷ものにすべし。右各たて置、其後一重〳〵に土高さ五、六寸にまぜたてべし麦肥し。に至てよし。跡作に毒無シ。

日用喰物之事

一、さんばく(75)を煎粉とし、朝茶うけにすべし。気を調、又は農業に出、食遅き時も疲れず。

一、太半麦常盤(76)(77)は菜を入、節句抔は吉半麦(78)にすべし。極暑之時分は菜をのぞき、秋入レ之時は、昼夜労する故正太にし、出入に喰すべし。疲れる故一度に喰仕かたし。右ニ附数度喰せされば疲れる。猶又肴抔喰すべし。

一、汁は常盤ごと味噌にさゑん沢山に入べし。折節は鰯、鰺の類、頭わたをさり用べし。肴、脾、胃を潤し能ものなれど毎日は却て宜からず。汁有ばさいに及ばず。さい有ば汁におよばず。色〳〵すれバ第一手習のついへ多し。病人客抔には格別家内の喰に上下の隔仕間敷事。

一、昼は半麦、亦は労せざる時は有合に喰すべし。晩は雑水又はすいとふにすべし。（惣分是百姓之喰物なり。能有益有ものなり。此品迚も大喰すべからず。農人は身楽になき故、大喰よしと其身もおもへども、喰のきおいに労せば、脾胃やゑて後の傷みと成べし。何にても内目に喰すべし。件之通り仕附たれば、働とも格別おとる事なし。よし又おとるとても由断せされば。雨落石之くぼむかごとし。時の間に山を築と

(75) さんばく、小麦、大麦、裸麦
(76) 太半麦、太米と麦を半分ずつの食事
(77) 常盤（トキワ）、普通の日
(78) 吉半麦、吉米と麦を半分ずつの食事。

ためあしく搗置、米抔ならば嗅み出来るなり。

飯たきよふの事

一、悪敷香出来し米は、めしひわきの所、すゞ玉の葉二、三枚入べし。よき匂ひに成なり。又喰湧時、火をひき、茶椀に水入、蓋の上に居べし。随分喰出来るなり。さすれば薪に益有。

年により苗過不を知る事

一、正月十五日、朝の月残りなば、苗物沢山としるべし。又残りなくば、苗もの不足と知るべし。

菜の過不を知る事

一、秋の彼岸九月へ一日掛れば、一ケ月の菜不足なり。又二日掛れば二ケ月分不足と知べし。

肥しを拵へる事

一、こへ壺数所拵え置、馬糞たて返し、それを入、酒造ることく毎日まぜべし。たとへハすへ水草等入置、よくくさらせ遣ふべし。又鰯等にてもませてよし。尤こへ遣ふ時、随分底の浮程にまぜ、引汲に二柄杓汲ば、上を三柄杓位汲べし。右之通せば汲人、骨折れどもよくましる故、むらなく滋く成、かた〳〵以よしいか程よきこへなり共、跡へ壱、弐荷残し置べし。後のこへ濁り安し。行水居へ風呂の湯抔は猶入べし。惣分こへ壺すこしにても干ぬ様に気を附べし。平常水遣ふ所へは、水溜拵へ置、其水、こへ壺へ汲べし。溜水汲たらぬ時は、たんぼの水汲こむべし。是すへ水故、正さ水よりこへ濁るなり。又煤藁[74]十月ゟ暮迄のうち買置、常盤馬の敷物にすべし。麦藁ハ悪し。

(74) 煤藁(ススワラ)、屋根などに用いた藁がすすで黒くなったもの

たし。又はす□に出ず。或は水の色替らば由断なく油入べし。稲色悉黒色に成、虫気と人めに立程の時は油功すくなし。前かとに油入れば虫のく事妙なり。惣分長日、長雨に付物なり。油断すまじき事。

一、葉おろしとて草稲に付虫有。これハ、長雨に山添、亦は高岸の下へ附ものなり。捨置ても日和なれば失せるなり。しかれ共、捨置ぬ時は鯨油、肥しにまぜ打べし。

一、ひらくさ虫は、出穂の稲、小黍、苧種に附ものなり。一夜かくれは至て傷るものなり。朝夕随分取べし、尤殺すに葉に摺附置ば、たいていは友の匂ひにのくなり。□きれを火縄にして所々に立置べし。高嗅みにのくものなり。くんろく抹香にまぜ焼べし。是を嫌ひのくものなり。

一、本切虫は地ぎわより切る。小き内傷るなり。是麦ののぎ、亦は煤本へ置べし。

一、かふてう虫迚、大根藍蕪抔に附ものなり。是かた詰し天気に出来るなり、是馬酔木（アセボノ）ノ柴随分滋く煎し、それへ囲炉裏の灰沢山に交ふてに附、裏表共掃て附べし。二三辺付ればのくなり。其余の虫は取べし。尤大根蕪にはかふてうの親附く。それより取ラざれはかふてうに成なり。かふてうは極々傷るむしなり。

一、さるみやうじ迚、大豆、葉豆に附なり。是五代、三代は時の傷るなり。是所々葉へ殺附置バ、友の嗅みに香てのく物なり。

一、瓜の類に赤き蠅附なり。小きうちは朝夕由断なく取べし。其儘置ば生育がたし。

一、蟻巻とて、莚ものによく附。厚朴の実、亦は蕣（アサカオ）の実、粉にし、或ハ囲炉裏の灰、朝露にひねりかけべし。のくものなり。

籾磨并米搗費之夏

一、籾磨時仕舞一、二俵はおとる迚も、其日の米糜風車にかけくだけ取べし。其儘置ば費なり。別して升ふさぐるものにあらず。そのくだけ弐番醤油の粥によし。亦米搗にしめし入まじき事。はげやすくとも米の

べし。跡は置能実入べし。生なるうちよりめしに入てよし。米の替りに成、味噌、醤油にも成なり。

紅草作る夏

一、十月申の日蒔、三寸間程に間引、ひたし物にすべし。跡は置枝附程に肥すべし。四月末、五月に摘なり。又しても雨に流れるものなり。盛りをまたず摘べし。熟すともうれ過たるより少前かとが、紅余計有。否日に干べし。

独活（ウド）作る夏

一、十月に暖き所を見合、厩こへ埋、唐ウ臼のがわ抔置、能くらを植、厩こへを置あくたの類積上置べし。春芽出し時おくたを着すれは、一、二尺迄も和らかなり。壱年植たれば再年有物也。折節厩こへ置てよし。

続物紛　（巻の下）

諸作虫之事

一、黒虫とて早作の稲に専ら付也。人数して取べし。其儘置ば子出来、大にわざする也。此虫は水いかりきわへ寄ものなり。由断なく押流すべし。

一、雲霞虫(73)は草稲に限らす鎌前たり共附傷ルものなり。是鯨油壱反に三合宛、水すくなくして竹の筒、脇へ錐もみし其筒へ油入、稲押分、右之筒より水の上へ振出すべし。能かげんに油走り渡るなり。虫付ば出か

(73) 雲霞虫、浮塵子（ウンカ）

蕎麦（ソバ）作る之事

一、旱こがしたる前の稲跡ざつと鋤かきし、其中へ投蒔にすべし。厩こへ上へ切らし、溝あげ、置だる一、二返かけべし。尤風雨ごとに傷安キものなり。先夏の末、こへぐろ又は畑の端気を付れバ、捨り蕎麦はへ有ものなり。是に黒粒壱つにても有ば、其年は蕎麦豊年と考べし。又黒粒なくは蕎麦作滅すべし。再〻風雨に逢、傷なり。凶年或ハ遅く共、種程は作べし。霜に傷し迚も再有ば種には成なり。種きれぬよふにすべし。粉に引、ねり蕎麦にして叩キ、大根又ハおろし大根抔入、喰へば米よりもよし。暫く腹へらず、是ニ鯨、雉子、獅子、蠣、栄螺、此類喰合すれば腹傷むなり。右七、八月頃に作るべし。

苣（チサ）作る事

一、秋の彼岸に蒔、こへかけ、上に磨ぬか置べし。十月頃に植、尤年内に初葉はづすよふに早くすべし。右通ならば春沢山なり。早植も遅植も替る事なし。さすれバ早く植るをよしとす。江戸苣迚葉延やかにして和らかな苣有。是あがり早し。山苣とてしかんたる苣はあかりおそし。肥しはだるこへ一夜更にかけべし。小便亦はあくた抔嫌ふなり。乾地よし。再年の所へ作るべし。すいとふ雑水喰菜にもよし。

豌豆（エンドウ）作る事

一、小麦にまぜ、八九月頃に萌べし。苗代の踏ごへ亦は春田へ入てよし。豌豆には肥しに及ばず。種は小麦に少しまぜ、山畑へ蒔べし。麦にはい登り起ておるゆへ実に成なり。余計有ば喰に入べし。米の替りに成なり。味噌、醤油にもよし。尤地は五、六年とな行。

蚕豆（サントウ）作る事 (72)

一、八、九月頃物跡打ず、其儘にて堅き所へ植、其後とても草引鍬入ましき事、三月頃土を苅、田肥しにす

(72) 蚕豆、ソラマメ

分葱（ワケキ）作る支

一、秋土用、稲跡へ厩こへ埋、種の皮よく去り、並べて浅く植べし、小便一夜ませにかけ、入用の時間のきれさる様に脇をかぎ引べし。三月迄が盛りなり。尤植る時種わきて植べし。水とふ雑水によし。種は幾日も干、火の上に釣置べし。

葱（ネギ）作る支

一、埋肥し、其上深く植べし。本皮はき、亦根の本粒程の堅きもの有。それものけ一筋、二筋ツヽ薄く植べし。取時摘べからず。分葱のごとく引べし。是は毎月植替ればせんくりに喰るゝなり。肥しに小便よし。尤飽なし。遣用分葱に同し。是痳疾にて小便通せず時、右の煮汁にて腰湯すれは能通する也。

韮（ニラ）并蒜（ニンニク）之事

一、韮裸垣の植抔へ植べし。一年植れは植替に及はず。

蘭蕙（アナツキクハン）萱草（フキミヤウガ）蕗茗荷

一、各韮に同し。尤茗荷は沢山ならば切干置べし。青の汁によし。

(71) 罌粟（アウゾク）、ケシの一名

罌粟（アウゾク）作る事

一、秋土用に地うね作り蒔べし。はへて後間引ひたし物によし。薄く置ばたわら大にして実沢山なり。実は胡麻の替りに成なり。

の覚ざるうち蒔べし。何にても菜の類は如此すれは虫附ず。

蒿蒿（シユンキク）作る事

一、秋の土用蒔立にし、肥しは水菜に同し。入用之時は心を摘べし。枝出る故沢山に成なり。尤霜覆すべし。

菠薐（ハワレンソウ）之事

一、右同断蒔べし入。用之時間引肥し同断。黒かねを嫌ふなり。地拵へし、日を替て蒔べし。二月末迄有。

錦大根之事

一、埋こへし蒔べし。厚くは四、五寸の間に間引立、肥し飽なし。葉ハ苣同様に喰べし。根あしらいによし。蒔時秋土用。

菜芥子作る支

一、蒔置苗植にすべし。随分肥し実能熟して取べし。うれさるは辛みすくなし。常にも能干て遣べし。蒔時秋土用。鮎、海老、蠣（カキ）、栄螺（ニナ）、鱈（タラ）、もづく此品に指合なり。

ほつきん菜作る事

一、秋土用蒔置、苗植にすべし。葉喰に入てよし。したし物、あへものにして沢山喰すれバ上気するなり。とくわか同断。ほつきん菜の実菜芥子ののふ有。

種蕪共に置べし。春ほこるなり。遅蕪は秋の土用に蒔べし。稲跡へよし。間引す植べし。二、三月が盛りなり。春此分漬べし。惣分種は大根之通流に漬べし。水とふ雑水によし。

二番稲作る事

一、半夏三日前[65]に蒔べし。早稲跡、中稲跡へ植てよし。

弐番稗[66]作る事

一、二百十日過[67]に蒔、二百廿日前後[68]に植べし。稲跡ざん〳〵打かへし、厩こへ、草ごへ、等入五、六日地をすやしたるごへを入、植べし。別して虫によわきものなり。むしのたけき時は少く作すべし。

人参作る事

一、六月土用[69]、赤土砂ましりの地よし。大根地の様に拵へ埋こへし蒔べし。尤厩ごへ上に置、四、五寸に葉を延し、入用次第に間引、三四寸間に置べし。段〻こへ掛れば、中の大根程に出来ル。黒土、赤さるも拵へ作れは紫色又ハ白く成、砂入の赤地は紅色に出来る也。種は大坂より下り、人参二、三本置べし。のふよし地種は色薄し。

水菜作る事

一、秋の土用[70]畑の乾地へ埋ごへし、長あごにし蒔べし。虫随分取、生小便一夜交にかけ、菜入用の時間引立苅べし。否跡へ能菜出るなり。たとへ臺出来ても二、三度も苅べし。其跡種に致せば筋少く出来るなり。尤古種よし先ぐりにすべし。是蒔立よし。尤種を蒔に地をうね作り置、あくたをひろげ地を焼て、ほのき

(65) 半夏三日前、六月二十九日

(66) 弐番稗、稲作の後作の稗

(67) 九月一日すぎ

(68) 九月十日前後

(69) 六月土用、現行暦では七月二十日から八月八日

(70) 秋の土用、十月二十一日から十一月八日

畔植之事

一、麦地之畔、大豆は山大豆、黒大豆、青大豆、此三品よし。畔堅く成ざるうちに植べし。大りて後三辺計心留べし。留ざれはかづらに成なり。山よせの春田畔、影地抔へは次郎五郎小豆、黒小角豆抔よし。

煙草作る事

一、青麦之中、壠にし二、三返こへし、それへ床苗植べし。麦苅て肥し致しなばしやれなおる。それより中をし次第に能キ肥シすべし。本葉かぐ度にうねべし。其節〻ゐ根を下ス。心留て強きこへし留。こへには正鰯こへかけべし。尤虫又は脇取事。極暮由断すましき事能うれて取べし。

粉豆作る夏

一、三、四月頃芋のふち抔に植べし。早稲跡に能ものなれ共、年によりてはとれず。疱瘡序熱に疳邪出るか又は張弱き時、是生粉にして水ニて用べし。功有り。

胡麻作る事

一、四、五月日和見合、蒔べし。俵附〻心留れば能実入るなり。随分こへし、願くば風当さる日当りの地よし。秋は雨風励しきものなれば傷安し。石地にてもよし。日和に再〻打はよく出来るなり。

蕪菁（カブラ）作る夏

一、六月土用大根作る溝へ蒔べし。下タ堅き故、本よく丸むなり。それを八、九月頃稲跡へ植、肥しは小便一夜、更に掛べし尤湿（シツ）地、能き畑へもよし。香物は霜月に取漬べし。尤漬る分ハ葉をつむましき事。葉を取し分は鱠の子のことく短冊に切干べし。青汁の実によし。葉も沢山なれば干べし。飯菜によし。その跡

藍を作る事

一、春彼岸に床拵へ蒔べし。尤二番の実種によし。薄く蒔、随分肥し四、五寸計のひらばりし、苗を麦跡へ植、まづ厩ごへを否本へ置うねこむべし。上に置ば虫附なり。それより捨置、五月末より手入し、六月土用中に能こへ仕込、捨置、能日和見すへ、朝くらきうちに苅て干べし。花咲ぬうち苅がよし。尤大日ニて本やける時は水入べし。傷まず水安へ作れは十分に取ル也。

芥子作る事

一、春彼岸、種蒔、灰置、古莚着せ置べし。はへて後、莚をのけ四、五寸程の時分、乾地へ植べし。折節こへすべし。肥過或は霜雪掛ると辛みなし。取て後も寒風当れハ辛み失ル。枝、葉、実とも、醤油ニて煮喰へハ疾気を払也。九月末頃取べし。

夏粟作る事

一、麦跡へ蒔はへ出る時大雨降と搦上げ心不レ出。蒔て上に薄置べし。蒔立又は亦(ママ)は苗植にしてもよし。こへ弐、三辺掛べし。過ると虫附なり。八月に苅べし。

秋粟作る事

一、六月土用二日籠種蒔べし。土用過ると、こへ余計掛べし。よごれ粟は苗植にしてもよし。ねず粟は藍跡、煙草跡によし。たが粟は早稲跡によし。搗て四合に成飯に入、米の替りに成なり。能ふへる糯粟は埴(ネヤ)り強く喰にならず。かしの子は木□かせののりにすべし。尤壱端のかせならば中椀に壱盃入てよし。餅にならず。たが粟は風気の時、粥にして喰へバ、能発汗するなり。

(63) 稈（カン）、（秆）わら

(64) むかご、ヤマイモの葉のつけ根から生じる子

鴈（がん）芋作る事

一、春彼岸の後ニてもはへたるを引、たんぼへ植べし。沢山に出来る也。肥しには干鰯、根三ツ、四ツ宛指べし。一年植たれは年〻はへるなり。

稈(63)作る事

一。壱番稈は春こへ苅、なかばに床拵へ蒔べし。麦地の畔、尤本洗いて植べし。苗は小キがよし。麦跡へ作る壱番稈は、植んと思ふ七、八日前に床へ蒔、厳敷肥し五、六寸延たる時洗て植べし。植て後はこへ致ましき事唯二、三辺中打べし。こへ掛れは虫付なり。ひらくさ虫取べし。粉に交引能ものなり。めしには宜からず。布織のしによし。

手芋作る夏

一、二月末、三月初、陰の地深たんぼのごみ抔、上ツた所によし。地堀、下へ古莚敷、其上へ厩こへ埋、其上に植土着せ、磨ぬ。かの類ぼか〳〵したる物置、おりふしこへすべし。土龍好むものなり。這入さるよふに脇防ぐべし。竹のしん、枝付、あや木の類所〻に立置べし。葛ニからみ、実就ル十月頃に拾置種にすべし。三年すれバ用に立なり。

むかご(64)の事

一、芋のふち亦畑ならば埋ごへし、三月頃に植、手芋のごとく手を立べし。実就ば其儘置、十月頃に落たるを拾置、春あご蒔にすべし。是も三年振に遣わるゝなり。十月に取べし。種は手芋のことくなり。むかごは痰によし。手芋共に水とふに入べし。

の上へ入焚べし。随分米の替りに成なり。又ハ餅にしてもよしからハ、横降のかゝる壁囲抔によし。荒皮常の如く煎し痳疾に用べし。小便通しよし。段〻用れは治る也。

麻芋作る事

一、暮、早春、地深く堀かへし置、彼岸日和続時、うね大にしてむらなく蒔、能たるごへかけ置ごへし、又煤け藁置べし。蒔し時煤藁取ル。其時鳥引ものなり。ばんすべし。それより三、四寸計のうち間引随分共こへし、次第に能こへ又は鰯抔かけべし。乾地よし。再年作り付たる取よし。新地は訪メず。

綿作る事

一、石地、浅地、北請の所よし。綿実八十八夜ニ外へ出し、一夜置寒に当べし。さすれは虫気すくなし。寒傷みせず。其翌日より実灰にまぶし。地随分浅くして蒔べし。夫より五月中頃迄捨置、五月末、六月に草引こへ掛、段〻手入し、尤鍬深く入まじき事只上の草そゝり、厚き所は間引、薄うに枝付様にすべし。夏土用中に必摘留にし、脇再〻取、木しやれる様に作るべし。手入は晴天の昼すべし。朝夕は露有て土掛る事悪し。土かゝれば葉傷み桃付ず。五六月頃むもれ日和打続いなさ掛る事有。其時は虫気に成、能気を附虫取べし。おふかたもゝ付ても虫傷ニてふかぬ事有。由断なく手入すべし。塩雰南風嫌ふなり。八月、九月盛りなり。尤作り付たる地よし。影地は咲あしゝ。

蒟蒻玉作る事

一。春彼岸秋の陰抔惣分陰地よし。あくたこへ埋、其上へ植、磨ぬかの類ぼか〳〵としたる物沢山に置べし。折節草引ばよし。たるごへ黒金嫌ふなり。入用程は取跡其儘置べし。植替におよばず。土龍(62)好ものなり。入さる様にすべし。

(62) 土龍、もぐら

生姜作る事

一、春彼岸迄にこへ塚(クロ)か又ハ日当り能所へ当分浅くふせ置、二三寸はへて後陰地へ随分埋、こへ仕込、根深く植、上にぼうでう磨ぬかの類ぼか〳〵するもの置、地うつかすべし。さい〳〵肥シ掛、旱に成ては由断なく水かけし、植様は平みを上へして置なり。獅子に喰合れハ必癩瘡を煩ふとしるべし。

牛房作る事

一、暮正月初、深く打起、石亦は□あくた抔拾ひのけ、能く塊を割、地底迄求こへを打、二、三辺堀返し、随分こへ仕込置、其後蒔べし。上へこへかけ磨ぬか厚く置、それより九月、十月頃迄こへ致べからす。またに成なり。只間引根も葉も汁に焚べし。尤三、四寸間に引てよし。地深日発りの乾よし。三年牛房こなし右同断。これは臺出るを見合、直に其実いつにても時節嫌わず。作れバ喰きれる事なし。

小黍作る支(60)

一、春彼岸に蒔、随分こへ仕込麦跡へ植べし。善悪にかきらず畑へよし。能こへ三辺程掛べし。可レ成は闇に穂出る様にすれは実入よし。ひらくさ虫附ものなり。随分取べし。尤虫沢山ならば火を生てよし。搗て弐割五分減(61)。喰にして米の替りに成也。餅にしてよし。二番小黍は三月末、四月始に蒔なり。尤彼岸蒔程にハ出来ず。惣分からハ干置、牛馬の冬飼にすべし。

高黍を作る事

一、春彼岸に種蒔、五、六寸延し時、芋地之ふち畠のふち抔へ弐本ツヽ植、ふとりし時弐寸計本をよけ鎌地底へ打込、四方へ立て引べし。ひろかる根切れるなり。都合三辺程切べし。さすれば脇作りのこへ取らすして、うしうれたる穂切、家の軒にさし干べし。干て後こき、荒皮唐臼にて取、石臼にて挽割、一夜漬米

(60) 小黍(こきび)、高黍、いずれもとうもろこし

(61) 減、減

置ば雑水菜抔によし。

ねりま大根之支

一、土用覚て後地こなし、格別に念入埋こへし作るべし。極月、(58)正月頃迄有。

田大根作る事

一、稲苅跡鋤返しうね作り蒔へし。委く地こなすべからす。下ニ塊包もれしかよく根ニ入也。

三月大根之事

一、秋の土用前に地こなし大根同様にして蒔べし。しかし上に置ごへすへからず。惣分大根は根葉共に飯菜によし。皮は馬の飼によし。真ンはおろし飯菜にすべし。馬のはみ大根のうちたり共、真躰を鱠の子の如く短冊に切干置べし。青の汁(59)に入てよし。若十一月末、十二月に釣大根致さば、葉の附根のしん十文字に庖丁目すべし。心共ざる也。其儘置心出ればす通也。釣大根は閤口たりとも葉さり釣ばす出来なり。腰気にて腰張又ハ冷るに干菜の煮汁ニて腰湯すれハよし。亦は包腰に敷てもよし。

大根種取用之支

一、十二月末に種大根引、三つ壱分根を折捨、もとみしり植へし。種かへらず臺立事も遅し。種は臺立登花咲かぬうち心留べし。さい〳〵肥しすへき事。種取時分は花壱ツ、弐ツ心に有うち苅、流れに二、三日漬ぬくべし。夏大根はほん大根と一所に蒔置、種取べし。それよりうちに作りたるは種にならす。三月大根は、二月頃出来、遅きを引植、種に取べし。二月、三月盛りなり。種は各右之通すべし。

(58) 極月、十二月

(59) 青の汁、清(スマシ)

(56) へら芋、生芋を切り干したもの

(57) 磨ぬか、もみがら

苅こへ置前草を否そゝり、厩こへ置、それよりだるこへ三篇程かけべし。そのうち蓬をかへし草引中すべし。九月末、十月頃霜のおりさるうちに取、鍬切、又は小き芋は、へら芋にして(56)干べし。薄きはあしゝ三歩計に切べし。惣分能芋迚もへら芋に仕置は、明る五月迄飯に入てよし。生芋より益なり。へら芋三合飯に入ば、米壱合余りへしてよし。又是計り食へば壱人知に四合有ばよし。粉に挽押ほふとふによし。水とふ或ハ飯に入て米の替りニ成なり。尤ほふとふハ湯へ入て煮べし。煮て後、味噌、醤油の類入てよし。始より入ればとゝのはず。右のへら芋、壱升掛目弐百六拾匁有。引粉七合五勺有。唐芋と墨を喰合すれは毒するなり。芋種の残り沢山ならば、彼岸過、暖気立し時、丸ニて一日干、磨ぬか(57)に入、俵に詰置べし。七、八月迄持るなり。亦は取、否ふくちやう茅苅、能干、惣分土の当らぬ様に右の茅敷脇へも立、上へも着せ、土掛置ば随分五月頃迄もてるなり。

夏大根作る事

一、春彼岸、地能堀返し、埋こへし、彼岸覚頃ゟ作べしだるこへ等かけ、上へ厩こへ等置べし。四月末、五月中頃迄が盛りなり。段々間引べし。又四月に蒔ば七月盛り也。惣分長雨に傷ものなり。尤堀返したる時、だるこへうち込、干上て作るべし。大根は一切如此すれはよし、

一、五月に蒔ば、七月、八月盛りなり。是同し種に限らず。秋大根又時しらず蒔てよし。

本大根作る事

一、地こなし、夏大根におなし、六月土用に作るべし。八月末、九月初迄手入せず、草にせらし置べし。九月頃さら〳〵嵐吹時分艸を引、肥しをせば虫気すくなし。十月末、霜月中頃ゟ内に干大根または切大根取べし。尤闇口よし。月夜盛りハ中にす有。西風吹ざるうちは中にす有。葉附根より切縄にかけ、陰干に仕

かわりになるもの也。尤花咲程に肥すべし。若、旱続かば水たつぷりと入べし。水不足なれば風味悪し。

そゝり小芋の支

一、芋もなきそゝりの目をも小芋なり。飯に入ても益なし。是は明き畑或ハ苣の中へあご蒔にすべし。三、四寸出ば水とふ雑水に入てよし。小きうち取故小なし。春彼岸に蒔べし。

大芋作る支

一、春彼岸薮開き抔陰地によし。からハ里芋に同し。随分こへすへし。厩ごへ、苅こへ等沢山に入ば目に傷まず。霜月に取べし。

芋赤芋作る事

一、春彼岸、埋こへし、陰地へ作るべし。専う雑水すいとふによし。随分肥すべし。根ハ種より外にならずこなはほこらず。田にしてハ四年、畑なれば六年こなゆく。一切芋は右之通こな行なり。

唐芋作并囲置事

一、壱反作れは種ふせるに、床五代程(55)正月中ころより堀返し、彼岸中頃うね作り、埋こへし、それへ中ウの芋拾貫目位植べし蓬(ツル)五荷程出来るなり。否こへすべし。惣躰暖気立し時、土かきのけ日に当べし。蓬一尺計の時能こへ、鰯抔かけ、これより肥止メべし。植時は半夏を中へし。又床には心ンの在し時が植時分なり。随分蓬しやれたるがよし。芋地は疲地之乾地がよし。日和之時拵し置べし厩こへたて置、鋤込にしてもよし。又うねこみうね作てもよし。雨前、雨上り、小雨に植てよし。大雨は植て後、地かたく成故悪し。日和に植れハ朝晩水かけ覆すべし。右蓬節三つ、四つに切、手植にすべし。長蓬はよからす。植跡へ

(55) 五代、三十坪

十六小角豆の事

一、春彼岸に作るへし。畑によし。惣分蓬物は心切べし。

小豆小角豆の事

一、春彼岸畑によし。二度作るなり。

小豆作る夜

一、春彼岸早く中すべし草なり共、麦株なり共、引本へ置べし。蟻抱付ず。尤花付ぬうち手入しすべし。花散さば就らず。日を撰ならば植べからず。小豆の類は煮むらに成もの也。湧出してよりハ鉄物にて再〻まぜべし。むらなく煮るなり。

夏大豆作る夜

一、春彼岸ニ植鞘付て後葉を取べし。尤いや地へ植ましき事。

葉豆作る夜

一、春彼岸いや地ならばこへすべし。

里芋作る夜

一、麦跡の田によし。水安へ植べし。春彼岸に種芋出し芽の有を撰、麦の中へ植べし。肥シに飽なし。鰯は程掛べし。先初の小からがき水とふ雑水にすべし。尤葉は干べし。喰菜よし。それよりからをかぎ、切干にすべし。秋過てハ連じて鉤べし。各喰菜によし。九月末、十月頃にから殆べし。芋実入よし。芋は米の

刀豆（ナタ）作る叉

一、春彼岸ニ蒔置立、或ハ苗植にしてもよし。実不レ入うち当、坐漬にし後味噌の中へ置漬にすべし。実入て後、鞘共黄焼末（マシ）にして喰、傷、又は虫腹の痛に白湯ニて用よし。

眉児豆（インケン）作る叉

一、春彼岸に蒔、三ツ葉位の時埋肥し、苗植にすべし。あへ物によし。亦実はぎ喰に入べし。蒔迄鞘むぐましく早く出すと種かへるなり、蒔附にしてもよし。

夕顔を作る事

一、春彼岸に厩こへを埋置、これに五粒位蒔べし。随分共肥し。尤棚を拵へ、古莚藁類棚へ敷べし。はい根それへおろすゆへ日に傷まず、根脇へさすなり、本根遠方へ行さる様に、前かどより気を附べし。根先にても鍬障らばならず。

濱壺盧（ユフガホ）之叉

一、春彼岸是はやいもの也。地へはわせ藁敷べし。越瓜の通作ればよし。

南瓜（ホウフラ）作る叉

一、春彼岸植様、壺盧之通。是は棚してもよし。地へはわしてもよし。火の上に釣置ば二、三月頃迄持る也。喰菜によし。

し。少しの間の作なれ共、苣より茄子の間盛りなれバ益有専。水とふ雑水に入べし。夏の土用に葉を取陰干にし、末(マツ)にいたし置ば暑傷ミ、又何れにても喰傷に用れば妙有。

越爪種蒔并植る事

一、春彼岸に厩こへ埋、床コにして暖き所へ蒔べし。だるこへ掛、莚きれにても上へ置、丸葉に出来て後、坪に四、五本宛植べし。三ツ葉出来ると心ン切、それより段〻心切る胡爪に同し。蓬行(ツル)先、麦藁敷べし。是は爪くさらぬ為なり。田の麦地相応するなり。尤小さきうちに植、再〻むし取、小便壱夜更に掛べし。ほそきうちはこへ薄きがよし。水とふ雑水によし。

ふらう作る事

一、春彼岸ニ蒔、苗植にても又ハ置立にてもよし。水とふ雑水によし。尤種植る時迄鞘むぐまじき事たながへるなり。古種よし。

二番ふらう作る事

一、四月の末□□に植べし。専ら秋就るなり。田芋(53)の縁抔によし。水とふ雑水によし。喰菜にもよし。あへ物にもよし。沢山なるものなり。

垣小角豆作る事

一、春の彼岸に弐尺位の間に粒植にすべし。垣大豆は一間程の間にして、各灰置べし。垣へはわするなり。小角豆は小豆同様なり。大豆は黒豆同用にして喰(54)に入て米の暫りになるなり。

(53) 田芋、さといも

(54) 喰、めし

(50) 午後四時頃

(51) 早茄子、収穫始めたばかりの茄子

(52) 遅茄子、収穫末期の茄子

続物紛　（巻の中）

茄子種の仕様并植様手入之事

一、十二月中旬より囲炉裏の辺に、樋に水入置、木晒(ママ)きれに包、其水に漬置、折節あすり、亦ハ囲炉裏の角へ埋め萌すべし。実少シにてもふくらめば、日当りの暖き所へ弐、三尺深きに堀、厩こへを埋、其上にだるごへの仕置、種蒔、灰を其上に太薬厚く着せ置、まだ作り覆すべし。尤青天長閑なる昼に覆をのけ日に当べし。□ツ葉青み見へし時、毛抜にて間引大ル。たがい段々に間引、立花附程にふとらすべし。一夜ませにこへかけ再々灰置べし。尤蒔而うちよりはへ出る迄は、覆のけたる時、七ツ頃(50)に至らば、否右之通覆すべし。植る時は根切ざるよふにころがし、本へ土を附て植るなり。少シにても根傷有ば就(ナリ)すくなし。随分肥すべし。植付る地ねがわくハ、踏堅めたる所を植る程和らげ、坪こへ能仕込植べし。ね堅き故日に傷まず。尤坪の水、能はく様にすべし。水たまれば枯る也。二重物、小便、鰯こへ、厩こゑ此分肥しに嫌ふ也。尤塩汁潮は山枯するにかけてよし。早茄子(51)はほそく味わいよろしからず。遅茄子(52)は大して味能あきる事遅し。雑水、すいとふによし、惣分茄子は長く用る故。益有種は塩漬に仕置べし。亦は地に埋置てもよし。塩漬は日傷山枯すくなし。日傷み雨傷有ものなれバ、田畑ともに□べし。

胡爪を作る事

一、正月中頃、実を木晒(ママ)きれに包、手水場の暗き日当りを見合、挺き、土へさし込、萌すべし。ふくらみ出来て後、植所を定、うね作、厩こへ埋、種を蒔、見へかくれ土掛、だるこへし、上に煤薬抔置べし。はへて後、覆をのけ、小便薄つして一夜更に掛べし。葉に成ると六七寸の間に引立、三ツ葉にならば、心ン留、厩こへ本へ置べし。亦三ツ葉に成時心ン留、段々右之通終迄留ば能就なり。尤旱続ば溝へ水絶ず溜べ

白麦の事

一、何地にてもよし。此麦寝ても実入るなり。

搗てよし随分味ひあるなり。

利平麦の事

一、厚き地によし。肥し強くすべし。搗てよし。

長雨の時稲麦を取込事

一、苅込之時分、雨天続、苅す迚もくさり、苅し迚もくさり如何とも仕道なき時有もの也。或は大雨たり共、苅上小抱にしてはでのごとく穂さかしにして掛置べし。乾なり。稲も如レ此成時は苅込粒にして煎(イル)べし。埒明なるもの也。尤太(49)はこしき蒸にするといへとも、いまた様シとらず。右はでの如くする時は、家蔵の内抔雨の当らざるよふにすべし。

一、地に相応せざる品、亦は不益之品は記さず、兎角業に掛ぬはしれかたし。猶作り例すべし。尤田畑に限らず相応の端物作るべし。さなくては疲畑抔は中へ〳〵へと土取あげ、自然と捨り芝這入也。有無かれ端物作れは肥るなり。人馬の垣ともならん。

(49) 太、太稲

(48) 留肥(トメゴエ)、最後にかける追肥

へすべし。沢山にかけても底へぬけ夫程功なし、能キこへ糸引よふに再〻かけてよし。こへを手間役に益有、留こへに(48)鰯かけべし。種上へハ厩こへ置てよし。搗て三割へり、喰にして六割ふへる。

奴麦之事

一、粉によし飯にして味なし。

なむら麦之夏

一、湿地に作りても枯すくなし。搗麦によし。

小麦の事

一、痩地、石地、陰地によし。喰にして益有とも肝胃損する事多し不宜。荒麦は生粉挽壱升三合有、是、和らかにねり押ほふとふにして水とふに入べし。又ハ米の替りに飯に入ば、米三合、扣粉二合五勺ほふとふにして入べし。又糟はのりに成、其儘にて漿粉(シヤフ)を取いや糟は塩合味噌にすべし。早小麦ハ湿地(シユケ)によし。

裸早麦の事

一、堀上亦ハ痩地畠によし。搗てよし餅に引てよし。

大麦の夏

一、畑肥ざる麦地によし。牛馬に喰して毛付よし。皮を搗はぎ醤油ニよし。耳〻出来ルなり。又飴のもやしにもよし。

一、植てより廿四、五日振に取べし。稲傷ミ植かどみ有ば、其時附苗を以植たがん穂迚実に成ぬ稲有、稈等も植込更り有ば挽べし。三番草は夏の土用前に取。尤□みしるべし風入る故、本蒸せず故よし。藁格別よし。麦地は四度取べし。

(46) 夏、事の古字

麦作之夏(46)

一、九月土用過ると否作るべし。早麦亦は掘上抔は土用中半にてもくるしからず。遅時は春枯る夏有。早きハ石ゝ数なく共実入よし。先地こなし人にすぐれて能すべし。塊包もれ有ば肥しきかず、地厚き乾きの本麦地なればうね大くても苦しからず。浅地湿(シュ)け地抔はうね小くすべし。自然と地深く成故よし。

麦種蒔夏

一、麦大粒なれば反に一升宛、又小粒なれば四升五合宛蒔べし。麦種は鰯の粉油かす等にまぶし蒔べし、其上へだるこへかけ、土こへ置溝上べし。

堀上麦地之夏

一、あごへ灰抔置、其上へ種蒔べし。それよりだるごへかくれば(47)こへぬけざるゆへよし。惣分うね真直くに平等すべし。片向あれば悪し。

麦作手入の夏

一、一番鍬は東頭にうち、二番鍬ハ西頭に打べし。是片下りに成ざる為なり。二番鍬に溝二鍬取にうねへさらへ上留鍬迄は本へ土寄べからず。留鍬にてハ只あごの溝に成程麦の本へ土寄べし。初めよりのこへ糟埋む故、一入出来る也。惣分麦揃よふに作べし。何作にても高ひく有時ハひくき方実入悪し。中する度にこ

(47) 樽肥(タルゴエ)、下肥

抔なきよふにこなし、和らがさる所へハ増こへしみしり、草苅こへ、厩ごへ抔都合凡(凡)弐拾荷位入、うねこみ置、之れよりむらなく浅く耕べし。或ハ鰯壱籠をだる十荷位へまぜ、所〻へ持歩行むらなき様にうち込べし。こへむら有ば稲高下有故ひくき所は日当りあしくゆへ実入悪し。こへ入ざる内に植畔し、尤畔表切べし。其儘置ば草はへて悪し。

堅ばり地耕之事

一、鋤裏雪霜に当、ほこり立程干たる時分又鋤返し、雪霜に当べし。尤水田は宜からず。惣分和らがざる地はさいの浮時又こなせバ能やわらぐなり。

麦跡耕之事

一、鋤かへし水を入、荒かきをよくし、それより二辺程も塊なきよふに起し、土の随分□りたるを畔へかけ塗置ば畔ひなりなく故、水持よし。(之)それよりしろを随分かき、むらなきよふに地平等し植事。尤水安なれば見かへしてざつとこなし植べし。ざつとこなせば格別稲出来よし。しかれとも旱田は念入こなすべし。畔大きハ水持よし、惣分しろ水過れば苗の心ン切れ生立悪し。尤しろ水入ざれハ悪し。

畔植物の事

一、稈大豆植べし。中畔へハ太稲抔よし。新地なれば□□□□小豆植えよし。春田にても岡前の畔(45)は小角豆抔植べし。

草を取手入之事

(45) 岡前、小高い丘の近くの

品種の名を言わず二番と称した

の茶粥、白かゆによし農人には米軽き故益鮮し。尤弐百十日前に植べし。

旱魃年様之事

一、旱魃の年、麦地仕附ならすして、入梅頃迄植ざる事度々有。即成長の後も四、五度有て甚迷惑なる年なり。か様の年は水出来ると昼夜厭わず刻を争てはやく仕附るをよしとす。苗に節生い根の籾抔落るハ宜からずといへども、先苗取抱にして置べし。日数七日はくるしからず。又旱稲作る筈之地へも指替て中稲、晩稲にすべし。旱稲は至て悪し。さする時は、稲は却而宜きものなり。中にも去ル丙午年右之如く始□旱して、入梅三日前に田植し。例之ことくに思ひし所、仕附雨より後段々降続、ほとなく稲苅迄日和ハ適々ならでハなし。初の旱におくれて田へ深水溜し所、二番草の時ゟ稲倩む事虫気のことくに見へ、水も稲汁にあくのことくに成、稲熟して様見るに半作にたらず。跡にて考を附るに以後旱して、入梅頃迄仕附延なバ田に全く深水すバ、随分稲の早く生立てよし。此事ハ能々耳に溜置べし。右の年は春田も雨いたみにて、日本一流大凶年、翌未の春過より米を弐百匁価にかへぬ罕(マレ)な年也。

取目ためし[43]の事

一、反に弐石有ば能年と思ふべし。之れより勝れる事は稀なり。

耕之事

一、ひつち苅跡深[44]くかへし、畔を塗り寒水溜、よく氷らしてよしみと掘れ。畔のきれ等毛を付ぬ時たり共否ふさぐべし。ごみたまりて地肥るなり。其儘置ば地疲るなり。洪水あがりは猶気を附、ごみたまるよふにすべし。地盤にても再々こぎて見合事、正月中頃ゟ中打し、亦畔仕直し能かきやわらけ、足に障る小キ塊

(43) 収穫量の手本

(44) 収穫した稲から生える稲を刈り取った跡の田

筑前やろくの事

一、春田、泉亦ハ水押、地深抔によし。わき植べし。搗へり壱わり。五歩飯にしてふゑる。

やろく糯之事

一、春田、地深によし。わき植べし。

搗へり弐割。餅にしてあし。よしよわけれ共、細糯より取目有故、百姓の餅にしてハよし。能日和に苅へし、雨天なれば米はしらず。

もろきやろくの事

一、水安の麦地、春田ともによし。分き薄く植べし。尤年によりくらくさり有、厚くてハ生立能共取目鮮し。搗へり弐わり。飯にしてふゑず。

ひつちの(40)事

一、惣分吉稲(41)はひつち出すべし。実をいれず苅干置ば、牛馬の飼によし。糯ひつちハ実を入べし。寒晒しに仕置ば薬なり。

遅稲之事

一、沢田によし。つかみ植べし。搗へり吉同断。飯にしてふゑず。せきはんにまぜ又ハうるの餅によし。

二番稲(42)之事

一、早稲あと水安ひ所によし。つかみ植、肥しよく入べし。薬飼によし。搗滅弐割。飯にしてふゑず。能衆

(40) ひつち、刈り取った稲から再びはえる稲

(41) 吉稲、良い稲、太稲、赤米に対する語

(42) 二番稲、二期作の後作、稲近世土佐では特に

遅おきの事

一、春田によし。植様右同断。搗へり同断。

おく太の事

一、春田によし。分き植(36)べし。搗へり弐割。半飯にして能ふゑる。大人数の飯にして益有。藁牛馬の綱によし。家ふき藁にして煤藁のふあり。

おく伊勢の事

一、春田、地深(37)、水押抔によし。随分わき植、肥し強く入、出口たり共さしこへすべし。搗へり壱割。飯にしてふゑる。冷飯堅し。赤玉多(38)し。種籾干時年々撰べし。

ありまやろくの事

一、水安の麦地によし。取合に植べし。搗へり壱割。五歩飯ニしてふへる。味合至てよし。遺藁に随分よし。赤玉有右同断。

小やろくの事

一、春田の地深によし。分き植べし。搗へり弐割。喰(ママ)にして少シふへる。年により、くらぐさりあり(39)。

大やろくの事

一、春田、地深によしわき植べし。搗滅弐割。飯にしてふへず。遺藁によし。

(36) 分き植、薄植
土佐では一般に晩稲は、苗代、本田とも薄播であった

(37) 地深、強湿田

(38) 赤玉、赤米のまじり

(39) くらぐさり、株がくさることと

(27) 早太、早稲種で、インデイカ系の赤米、近世土佐で栽培された
(28) 疲地(ツカレジ)、地力が消耗したやせ地
(29) 新開地、新たに開墾した土地
(30) 石地、石の交った耕地
(31) はややろく、弥六系の早稲、『続物紛』にはこの種の記述が多い
(32) 麦地、二毛作田
(33) 春田、湿田
(34) 遣藁、綱、俵などに使用する藁(ワラ)
(35) 夫持米、夫持として藩から給与される米

早太の事(27)

一、疲地(28)或ハ新開地(29)抔へよしつかみ植べし。搗滅弐割半。飯にしてふへず。藁、牛馬の飼によし。

細糯(モチ)の事

一、石地(30)、抔によし。早稲一所に植れば虫傷多し。早稲中稲の間に植てよし。能日和を見合苅べし。少しにても雨あたれば、米み□らず。水有田なれば苅上にすべし。取めすくなけれとも餅によし。搗滅三割有。

はややろくの事(31)

一、麦地(32)によし。春田(33)にても岡まへに吉、取合ニ植べし。出口たり共さしこへすれハ、青米なし。又出口ニて一度干べし。籾葉ずしてよし。是遣藁(34)にすべし。搗へり弐割。飯にしてすこしふへる。

遅なぬかこの事

一、岡前、麦地によし。取合に植べし日に弱し。搗へり同断。米味なし。遣藁によし。絹ねりあく又ハ絹せんだくあくに至而よし。

きやうぜんの事

一、影地によし取合に植べし。搗へり同断。夫持米(35)に宜からす。

おきやろくの事

一、麦地、水安によし随分つかみ植べし。搗滅壱割五歩。飯にしてよくふへる。然とも米味悪シ遣藁にあしゝ。

(21) 五月女の数は一反当『農業之覚』には九人又ハ十人とある

(22) くらは株数の単位、科、くら、かぶと呼んだ

(23) 『耕耘録』の六、七十くらから八、九十くらとほぼ同じである

(24) 雲雀早稲、早稲の品種、以下同様

(25) 搗滅（ウチヘリ）、米をついた時の減少

(26) つかみ植、厚植、土佐では一般に早稲は本田苗代とも厚播であった

一、五月女は一反に拾弐人、麦跡又ハ山添の新開抔は十四人入べし。(21) 上田ハ坪に八九拾くら位(22)いの積りに植てよし堅り地又ハ麦地抔ハ百廿くらくらい沢田は六七拾くら位(23)に植べし。

雲雀早稲の事(24)

一、畑たおし置まへ麦跡抔によし。取目鮮く搗滅二割(25)有。飯にしてふへず。つかみ植べし。水契キ取へ早きを調□にして作るなり。外に益なし。嗅早稲も右同断。

彦兵衛早稲之事

一、地右同断つかみ植べし、□節石数の有所あり。搗へり右同断飯にして少シふへるなり。

早なぬかごの事

一、地右同断つかみ植べし、(26) 日に強し取め年によるなり。搗へり右同断。飯にしてふへず。

外山早稲の事

一、地右同断。尤水安へよし。つかみ植べし。とりわけ虫傷る稲なり。米品能見ゆれ共、ねばりて飯出来かたし。益無シ。

早稲取目様の事

一、惣分早稲は取め遅、稲の五歩、六歩位のものなれ共、早き故作るなり。大作宜からす。虫も出て傷るものなり。あとにて田大根能故作る也。

(16) 水安、水利条件のよいこと
(17) 二番作には二毛作と水稲二期作の二つの意味があるが、この場合は二毛作
(18) 代とは土佐藩の土地尺度であり五十代で一反
(19) 『耕耘録』では早稲六、七升とあり『農業之覚』には一斗六升とある、両農書よりかなり薄蒔である
(20) 吉籾、ジャポニカ系の稲、太籾、太稲に対する語

苗代地拵之事

一、麦作の成過日水安(16)を見合、弐番作(17)明次第鋤起し、雪霜によく当置、彼岸頃水を入すき起し先地くさ能すべし。籾蒔に近寄又鋤かきし能地和らげ、蒔三日前に豌豆みしり、草庇ごへ等むらなく入、よく踏込、高下なき様に平等し、水のかげんいたし置、二日目の晩方亦ハ三日めの朝蒔、尤水のかげんして蒔べし、清で間有と地葉付過る故根ざし悪シ、濁り有ば葉付ず故籾居りあしく能程を見合事。惣分下苗代ハ岸の蓮花盛りを時分と心得、或ハ籾五斗蒔んと思ハヾ地弐拾代(18)拵へべし。

籾漬并手入の事

一、籾壱反へ四升五合宛(19)にし、彼岸中日覚メ頃籾漬七日ふりに上てよし。蒔てより土用廿八日三十日に覚る様に考、籾あげべし。籾ハ漬過ても由断なく水替ればくるしからす。さきの日数を考蒔べし。吉籾(20)ハ芽少し卵ふくらみてよし。太は芽白くなりて蒔、外、太は芽二、三歩も出て蒔べし。籾上るとざつと日の気を入かわりざるうち俵にして、莚何枚もかづけ火焚取にて暖め、之れにて萌ざる時は湯かけ、右之通かづけ置べし。蒔て後針だけのころ青天、長閑を見合、昼中ウ水干七ツ過に水入、寒又ハ雨なれば水温メ、風吹ば水滅べし、さなくてハ籾寄るなり。又おきやうくハ壱反に七升置、随分厚く蒔べし。さがみ苗なり惣分早稲かたハ分ぬぬへ厚きがよし。苗日数廿八九日頃土用二日くらいこめて植べし。土用籠り過ると虫傷多し。蒔てより三十五日、四十日を過ると悪し。何分籾根を放れざるうち植ざれハ、上の根おろす。たとへおろさずとても其気ざしあれば、植ても下の根ざし弱く取目すくなし。少しにても若苗は下根さし有まて後上に根させば□し□□とるゆへ丈夫に出来る也。土用過なばはやく植べし。

五月女并植様之事

渡世せばき故末子のものゝはたらきなく名高き家も子孫繁昌せす。他人を養子とすること多し。此書に郷士を望ぬといへるもつともなるおきてなり。子孫面〻此おきてを守り公役を大切にして作業をおこたらずハ繁昌長久ならん事疑あるへからす。感心のあまりかくしるしぬ。

天明七未年仲夏吉日

谷丹内真潮書(11)

(11) 谷真潮が郡奉行になった直後の書である。

続物紛　（巻の上）

天の時地之利にしかすとは、わきて農家に辨べき事ならむ。天の時に種ものを播し、こと〳〵く地利に極て熟せしむ。既に北国には半夏(12)に田植し、我国ニハ立夏(13)に田植するの類ひ、是地利の違ひ大我事見るべし。中にも我郷は旱水波(14)の患ひあり。殊に水鮮き事他村にこへ、麦跡抔田作に殆劬労しぬれはあげて言かたし。惣して貢の外、米の乏き所柄ゆへ、専畑物を食し、日用之育とすよつて畠畑を重し、之に精力を尽して一刻の暇もなし。即百姓に心を抛、年を積て見習、聞習様しをとり、今において覚□せし事とも空しく捨もほいなく、聊此郷の地利相応の耕作諸食等の事書残し侍りぬ。萬一は往〻の補にもならぬかと思ふ而已。

天明丁未夏(15)
（七年）

(12) 半夏、半夏生（ハンゲショウ）
夏至から十一日目梅雨あけの日

(13) 立夏、五月六日ごろ

(14) 旱水波、干魃と洪水

(15) 一七八七年

皆人の上にめがつく横に行
　あし間か蟹のあさましの世や
十六夜の月は浮世のかゝみなれ
　みつれハやかてかくるならいを

或人論ていわく。人としてたれしも士にはなりたきもの也。一ツ先祖あらわし、二ツ身の誉れ、三ツ子孫潔する理なり。たとへ米銭ニ而償ひ求るとも其恥ハ消安し。予答いわく百姓ハ素順にして学んてさへ疎し。況や生れ儘にて学さるをや。犬馬の歯を経か如し。況不学をや。尤邂逅に聡明の人出生して、博学衆芸の名を顕し召出され知行格或等(式)に附せらるゝ。人社允に祖先の名顕れ美名国に響し、身の誉とも言ツへし愍に先祖の伝ぬる田畠銀銭を費し、士を買(8)農家規を破り、土気の去り、昏昧の身をして士形ちになり、人笑いも晴す。奢に長し家を亡ス本立をする事所謂不孝族らなり。何の芳し事あらんや。又器量ありて出世するとも、家ハ其儘二男へ譲、農家ハ立置へし、猶先祖規に不肖。続てハ功成身退く時の楽にもせんか、又問フ百姓郷士又ハ浪人にても求へき時節至ハ求へき事本意なり。若子孫放埒なるもの出生すとも格式又ハ家柄を恥て嗜事も有り。ふたつにハ家断絶の後たりとも一たん苗字帯刀の格のこりて子孫捨すとなん。答曰、是当然理と見ゆれとも左にあらす、且夕に塩物喰せんとて先夕水を飲置かことき に異ならし。

天明七丁未下春(9)　　高長

農民の事をおほん宝といへり。国の宝これにまされる物なし。又民ハ国の本ともいへり。四民のうちこれを本として大切の役なり。今の世にていやしきものゝやうにおとしめぬるハ物しらぬ故也。此の書ハよくわが役前をしりて分に過す外をうらやまず百姓のかゞみともなるへきものなり。すべて人は地にもとづきていきたる物故、百姓ほど繁昌するものなし。大名仕官の歴々は公界(10)りつはに見ゆれとも地に本づかす。

(8) 士を買、郷士株を購入すること

(9) 一七八七年

(10) 公界、世間

(6) 毛見、(検見) 米の収穫前に役人を派遣して豊凶を検査し、年貢高を定めること。

(7) 定免、一定期間の田租額を平均し、豊凶に関わらず徴収する貢租。

威なり、規威のみにて仁なけれハ、殃身に及なり。かみ欲も過ぬれハ家の妨となるものなれハ、只我身の倹約肝要なり。夫迚も人に隙る事ハなすへからす。先ちきれわらんづなどにても只捨は益なし。少シ身を遣ふて拾上我地へ入へし。是地の沃し也。さなくハ人の田へても捨へし。其儘捨置へからす。かと〳〵ケ様之無益心を付へし。我為にならすとも世の費をハ厭へし。百銭を以一銭の求し理に近き事多し。能考侍へし。

一、田地毛見(6)之時、百姓合入レに大方合なハ請へし。地頭の弱みへ付入、ゆするましき事也。度重れハ心怒りし地頭百姓の愛情薄成、終に古来之田地に、はなるゝ事多きためしなり。或ハ倍々豊年にても定免(7)より外に増事なけれハ、凶年とても免に届きなは非道成事を言わす何事も正直にもとつきて定むるかよし。又地頭よりも譬ハ壱升の合入ならは九合五勺に定へし、仁心あれは百姓和して末々の益なり。人は少しの心を施せは発気するものなり。又非道を以、壱升壱合とも言かけれハ、当時ハ益見ゆれとも自然と作人つきて地も痩る物なり。又大に害有譬ハ一作当りの田地なりとも、作人より惜む程に気を付置へし。地くるめ(免)安し。

一、昔の地士今郷士と唱、他続の事もおゝやけに売買を免され□国中に散住す。士准して世ニ芬しか故。百姓抬出(カセギ)して二、三十石の所務もなれハ郷士になる人挙てかそへかたし。大きに辟言とそ我常にこれを嫌ふ事菊のたとへの如し。既に己か本色を失ひ、不幸に踊(陥カ)ル事知らす、先士に化れハ其そなへをたて身を嗜み、心も侍にせん迚ハ六つきの銭も知らぬそふにさし構へ、此中三年に費所を僅か壱年に補兼るやうになる事必然なり。夫につき年々の所務たらわす。終にして家督に放れ其家衰ふ。又数多の男子持ても位たおれにて日雇手間もさせられす見る穴へ落苦みあり。尤稀にハ代々盛に伝る家も有とも、兎に角十に七家ハ他続し侍りき口惜き事なり。諺に親ハ苦する、子ハ楽する、孫ハおかけて乞喰すると言ひ、又郷士百姓小皷稽古ハ田売る〳〵と唱とかや可笑事也。古歌に

農耕の外なくて何の費もなし。頗ル利口過れハその箸にあたりて、却而家を失ひ身を亡すものなり。

一、親より百石の譲を得るもの、一生の中倍増の仕出なき時ハ、是れ一生親に養ハるゝの理也。力を尽し田畑等開発し親をはこくみ心を安し、家督倍増し子て孫に譲ル事こそ目出度けれ。然るを酒色博奕等に溺れ相続の家督を失ふ人は、先祖へ対して怨敵と言へし。さなくとも所務一杯(5)に月日を送りてハ冠婚葬祭の費あるものなれハ、忽家督闕ルもの也。この故に年中七八歩の積のなくてハ、家督持かたし。不正直くして病難凶年等の災難あれハ毎年家督耗減し家運尽るもの也。是則不正直にして運悪くなるは天のなせる災としるへし。常に正直を本として神仏を信心すへし。夫信有れハ徳有り徳有者ハ正直也。不正直にしてハ却而神罰を蒙り、自成殃不可。決右之次第ならん古歌に

皆人の祈心もことわりに
　直なる道を神や受らん

一、士農工商と定り百姓ハ士につゞく者なれハ、心も均しくつゝくへし。よろつ正直にもとつきて人の目をかすめ、盗かたりすましき事也。人知ぬとて盗賊又ハ貧るの心をいたきぬれハ、古人四知の誡のことく天知、神知、我知、子知、終ニ世上の譏嘲を請、其身を亡し先祖をけかす事恐れ慎むへき事なり。又士の次に列る事は是米穀の主にして、萬物の霊を養へはなり。されとも朝暮、糞灰に埋ル身なれバ、我より賤しく下に見る人なしと心得へし。かゝるかゆへに、すへて帯刀の人をハ恐れ、敬ひすこしも不礼いたすへからす。是我か家業と思へば無念心外にも思ふ事なし。又農家の中たりとも長者にハかまへて、いんきんにして身を謙るへき事なり。

一、何によらす理といへるもの詰すしては協わさる事なり。理詰されハ人謾り家乱るゝ□しあり。しかりといへとも、あまり理詰すきてハ、姦理といへるになり。かと〳〵過出来るものなり。只理ハ七ツほとにして十ふんに詰へきにしもあらす。三つハ枉て問へハ譲をこそ宜とすへし。これ所謂仁なり。理ハ規なり、

(5) 所務一杯、遺産を維持するだけ

の利理もなく、只倹約の功積んてこそ出世もする事也。能く心を付へし。

一、家の主たるものハ、朝起肝要なり。己れ朝寝せは家内それに習ふものなり。家内一時おくるれハ其費不少併人を遣ふに、慈悲もなくしてハ人したしむものにあらす。能く心を用ひ奴僕和せしむれハおのつから随ふなり。随いぬれハいかなるに不及、皆く力を労する者なり。併情過ても下奢り却而悪し、臨機応変の考あるへし。扨主たるものは色く多用なれとも、一日に半日ハ働きすべし。譬ハ懐手にても出来ル事多し。我れ先立ぬれハ、十にして十二、三もはかゆく事顕然也。又召仕之中も気ニ入ルと不入とあり。用心大事也。去れとも我か思ふ事七ツ八ツすれハ、能き人と思ふへし。又十一、二も仕るものは、心の一工ありてよろしからす。

一、三月より四月比は、夜明けて農事に掛るへし。五月より八月迄ハ星を戴き昼分ハ休むへし。是夏ハ人馬とも暑を除くの一ツなり。それ故朝夕厳しく耘ルへし。九月より正二月迄ハ寒を除き日出より耡し日をもつて帰るべし。農人は強剛なりといへとも、時によりてハなやみ有るものなり。

一、百姓末子之中病身にて農事ならさる者ハ、商術を習すへし。算盤ニ掛ルわさゆへ少しも費なし。有才而商術きらいならは医術を習すべし。誠に医人尊崇するゆへ、俄医ハ人のきらい屑とせす。かゝるゆへに百姓より出る医ハ其の本性をかゑりみ、正直専に貴き賤き共に身を謙りて人和をあつくし療方に心を用ゆる事肝要なり。医は意なりといへは千巻の書を暗誦するとも、療方に疎きは人に用ひられされは、権職にして人に恐れ敬はるゝを功とし、信仰なき者にハ薬あたゑず是れ医の本意なるへけれとも、百姓より出る医者、人愛第一なり。かくのことくなれハ生涯口腹を安んする事疑ひなし。

一、百姓ハ正直第一とし、風流なる事を求めす。只何事もかんりやくにして無調法なるをもて常とすへし。農事専に心懸け、弁へさる事は人の智恵をかり、聞習、見習て明暮他事なく、耕せは妙練其中に出来るものなり。素天性無調法なれハ他の嫌扱等ニもさゝれすまして、目上の人と交をもせす。只同輩の附合のみ

(4) 織衽(ショクジン)のみち、はたをおること

め、跡を強て不乞事ためしあり。よつて喰過る事なし。又しては果魚の毎に脾胃を損し羸疲するものなり。病気ならハ格別平常ハなけなしに育生へし。大事にする子ハだきすくめ不達者成事あり。男子ハ八歳比迄天姓の儘に育生ツへし。成長の後教馴すれハ自然と宜く成ものなり。陽気を屈するは却而よろしからす。十一、二より家業を習すべし。女子ハ幼き時より猶、気を附て守り立れハ夫を守れり。土ほり悪あかきさせそめるハ輙く直しかたし。八歳よりハ紡ミ蠶イかみかたちの事習すへし。十歳過れハ内にして教、織衽のみち(4)祭祀をも見習すべし。貞女の道を起居に言聞せ、全く心儘に育へからす。成長して気随に成ものなれハ、常〻教方ゆるかせにせす。厳かに暮さすこそいかめしけれ。人に嫁するものなれは、殊によりてハ高貴の身ともなり、上品の交もあれは、姓よりも育方ゆうにすべし。又鄙賤の浅ましき暮とも成なれハ、搗挽下賤の業とてもさせそめ置へし。男子より育方心を附へき事なり。

一、百姓家督財宝有ものは、家格を極め嫡子に八歩譲にして財器等悉く与へし。録ある人嫡子の外へ跡或分(式)ると言事をきかす。然るに町人百姓の風としてハ、庶子へ家督平等にわかち、剰へ己レ末子につきそひ、或ハ後妻の言葉を守り家督財宝悉く末子に譲者多し、嗟かしき事なり。家数多に分りぬれハ嫡子たる功もなく、親子兄弟不和になり終にハ家亡るものあり。よしや失すとも家督減して先或衰ふる事慙さまなり。親たるもの先祖へ対して不孝の罪遁れかたし。若嫡子放埒懦弱にして相続成かたくハ早く妻を娶て嫡孫へ譲るへし。これ天理に協ふなり。扨残る二歩ハ、庶子へ分ツへし。分ちたらされハ農人奉公等さすへし。農家の勤ハ給米はかり外に余力のふして労するなれハ、一穂一粒大切にしてけい気に不掛、故か自然に家督仕出す者多し。又商家の奉公ハ大給銀を取り、商業にて外に余力も出来、恙なく勤め終れは、過半の褒美等も貰ひ帰り、一度ハ吹付るか如成れとも、銀の中より帰り来れは、胆大く一朱一銭もめがけす。只けいきくれにて農事もせすして、すこしの間の働き貯も失ひ、妻子の養育にくるしむ者数多有り。譬ハ一ト年に三尺延る松の木に大木鮮なし。一寸延る楠の木ハ大木夥し。兎角農家ハ商家と違ひ金銀を鍬かきする

(2) 罟(コモウ)網　魚をとらえる網

(3) 関々は鳥の声の形容

此道の外なもとめそ世〻かけて
たゝ一筋に思ひ入へき

人の庭に麗木を作りたのしむといへとも我は椎樫のみを愛す。是百姓と同しき根さしを含めるを思へはなり。

一、諸木之中にも取分詠もなく醜く、いつれを何れとも見わけがたきは椎樫なれとも、其実不化こと〳〵く姓を分つ。先樫の能ある事、一つには農家諸道具是に限て用られ、二には上炭に成り、三には薪にして諸木之上に立、四には実むすひて凶饑うれいを救ふ。其功おふし。椎は皮をもつて漁の罟網(2)をそめるに外なし。又雑家の柱棟に用ひ、実をなせば人のうへを凌き、枝葉尤賤家の薪ともなり。一として捨る所なし。扨又石ハ質朴にして萬世不易の徳あり。火を出す事これにつく。又悪水荒濤をも防く其功挙て言かたし。件の木石綿なく質素の品にして、我是を重し愛する事日久し。然るに盛衰存亡の人として守れともおよばす。況や、奢りの儘に家職うしなふ。族におゐてをや。只〻恐れ慎むへき事なり。

一、菊の盛りは色関〻(3)にして詠もあかず。貴賤とも是を翫ひ、艶なる事言はかりなし。併今日なくても何の闕る事なし。其実を蒔に色〻種かや。らすれハ、色変化して白きか赤きに化するものなり。これ則本をうしのふ理なり。論語曰、君子務本本立道生とかや。しかるに今世の人のけいきどり、或ハ売女等の所為に近し。これを思へは迷へきものにあらず。

一、子を育には出生して十一日過、上へにて病ひなくハ五香におよはす。ふきの根きざみ振出し、百日の間怠す用ゆへし。百日過れハ一粒ツゝ喰すへし。歯あらわれて後は朝夕一ト箸ツゝにして、夫よりは月増に喰すへし。乳をはなれさる内喰馴しむれハ破喰の患なし。猶、母の病気乳はなれの時のたより有り。扨、二三歳の節に寵愛過きて言儘にすれハ、忽喰過るものなり。さま〳〵気を付へし、三四歳比ゟ何にても一度無きと言し物は再ひ与へからす。かくのことなれハ、譬、果菰菓子なと少しつゝあてかふて合点しそ

にこの一文を書いたものである。しかし、真潮が誉めた、封建社会に生きる農民のモラルを描いた『物紛』に続く、『続物紛』は、封建社会の基礎をゆるがす小商品生産を発展させる為の農書であった。

『続物紛』は、上・中・下、三巻より構成されている。内容は米麦作のみではなく、野菜、雑穀を中心にした多様な作目や加工品に関して記述されている。ここに描かれている内容は、当時の夜須町周辺の農業を対象に書かれていると見てよい。本資料紹介では割愛したが、『続物紛』に続き『物紛附録』なる一巻があり、そこには年中行事、神事などが描かれている。そこにでてくる、寺社、人物は明らかに夜須町のものである。この事から類推して、『続物紛』も夜須町周辺の農業を対象としていると考えられる。

物紛

一、夫公家弐十氏武家八十氏姓挙つて百姓と号せしより、農耕を業とし力を労して衆食(シュウショク)せしむ。(1) 其貴き事王孫にも劣らしとかや。しかるに祖翁辛苦励力のたまものにて適求集めぬる田畠之余力をたのみ、奢る心をおこして先祖之掟文盲なりと□りに破り剰へ伝得る銀米を費して、貴姓に沾フ。蓋し己か姓ハ改(断)□しぬる事、嗟かわしきにも猶あまりあり。不孝の両腰指こはらし我か功にて先祖を起と思ふ而已歟。既(現)に口に言事木石にも不及事なり。予か先祖仁右衛門農業専一とし、終日耕し除あれハ樵し身をおわる迄月星を戴き暮し基をたてしより以来、代く其道をかへす安逸に住しぬ。且数代之事なれハ代ことに庶子に田畑等分ち与ふるといへども、家督耗減する事なし。これ偏に農家を守るの徳ならん歟。子孫全く百姓の名目をかへす農家相続すべし。必しも心恣にせは先祖への不孝何事かこれにまさらん。其心を

(1) 衆食　多くの人を食べさせる

資料

土佐藩農書『物紛』・『続物紛』

田村安興

序

土佐藩農書『物紛（モノマギレ）』・『続物紛』は高知県香美郡夜須町に伝わるものである。現在は夜須町役場に所蔵されている。もとは同町内小笠原家の蔵より発見されたものであった。夜須町は夜須川流域に広がる肥沃な沖積平野に位置する。香美郡下全域がそうである様に、新田地帯である。小笠原家は夜須川中流域、十の木地区にある同町の旧家であり、郷士であった。

しかし『物紛』・『続物紛』の著者と言うべき『物紛』巻末の高長なる人物は小笠原家の系図には無い。高長なる人が如何なる人物かは不明である。但し、それに続く巻末言の谷丹内真潮なる人は著名な人物である。谷丹内真潮は、土佐南学の中興の祖、谷秦山の孫である。秦山の子丹四郎垣守を含めた三人は、谷の三丹と言われる。真潮は加茂真淵、本居宣長に学び父、祖父と同様儒学・神道に一家の説をなした。また、真潮は後の子爵千城の祖父の兄にあたる。真潮は北溪とも称し、学問の他に政治にも能力を発揮した。

真潮は天明五年（一七八五）浦奉行に任ぜられ室戸港の改修に成果を挙げた。その後天明七年（一七八七）八月四日郡奉行に、さらに翌八年大目付に抜擢された。真潮が政事に関わった時は天明改革の時期であり、藩主の片腕として改革の急先鋒となった。土佐では同七年池川村百姓逃散があり、また全国的には天明大飢饉が起こり、政治経済体制の混乱した時期でもあった。真潮が『物紛』を読み、支配階級が期待する、理想的な百姓像をその中に見た。そして、「面々此おきてを守り公役を大切にして作業におこたらずハ繁昌長久ならん事疑あるへからず感心のあまりかくしもしぬ」という一文を寄せた。真潮が郡奉行に任ぜられた直後